

「藤樹紙芝居」の紹介②

『車が田におちた』

(解説)

中江藤樹先生は、「良知(自分の心にもつている美しい心)」にしたがつて行動するよう心掛けて生活していました。また、門人たちにもこの「知行合一」の精神を熱心に説きました。困っている人を見たら、親切にすることは当然だと言えますが、実際にそういう場面に出会うと、見ず知らずの人には骨をおりたくない」だとか、「めんどろなことに困わりたくない」などの気持ちが出てきます。

一方、助けてあげた人から、感謝されたり、困っている人に親切にできた喜びなどを感じたりして、実際には親切にして良かったと思うことが多いものです。このような経験を重ねることので、ごく自然に実践できるようになるものです。



この「車が田におちた」の話は、中江藤樹先生が、伊予の大洲から郷里の小川村に帰ってから後の実話が

語り継がれたものです。藤樹書院で門人たちに教えるかたわら、近隣地域へ出かけて村人たちに講釈をしたりしていたころの話です。病気になるつた子どもの看病の仕方を近所の村人に、ていねいに教えました。また、ある時は、増水で崩れた小川の石垣の保全について、教えを請いに行くと、すぐに現場へ出向いて土木工法を教えるなど、労を惜しまず、親切に接したと伝えられています。

藤樹先生のこのような生き方は、小川村はもとより、近隣の村人にも大きな感化を与えました。人々は、講釈からだけでなく、良いと分かっていることは、すぐに実行に移す藤樹先生の後ろ姿からも、多くのことを学んだからでしょう。

藤樹先生が見知らぬ馬方を、率先して助けたと伝えられる「車が田におちた」の話は、低年齢の子どもたちにも分かりやすい展開です。会話を多く使うことで、分かりやすく親しみやすい内容としてとらえてもらうことを願って、馬方の相棒である馬の「クリ公」にも、会話の仲間入りをしてもらいました。

この紙芝居を見た子どもが、中江藤樹先生の人柄に親しみを感じ、自らも気軽に親切な行いができる、意欲のある子どもにも育つことを願っています。

(紙芝居)

①今から、四〇〇年ほど前のことで

す。

ここは近江の国小川村、藤樹先生の家の前です。小鳥たちが元氣よくチーチーと鳴いています。まぶしい朝のお日さまが、きらきらとかがやいて



ます。きのうからふりつづいた雨が、ようやくやみましかつきました。

藤樹先生「おう、いい天気になつて良かったなあ。そこらじゅうが水たまりになつているぞ。着物をよごさないように気をつけて行こう。それでは行つてきまーす。」

藤樹先生は、となりの村にでかけてきました。

②おや、向こうの方から、荷車がやつてきました。

馬方「このあたりは、道がぬかるんで歩きのくいな。おい、クリ公(馬の名)、気をつけて行こうぜ。道のふちがやわらかくなつていから、はまるなよ。おれも気をつけるからな。」

馬「ヒヒーン、おやかた分かりました。気をつけて行きますよ。」

馬方が注意しながら、クリ公を引



ていたのに、たいへんなことになりました。

③馬方「おつとつとつ、荷車が傾いたぞ。」

やわらくなつていた道のはしっこを踏んでしまい、田んぼの中にはまつてしまったのです。

馬「ヒヒーン、おやかた。どうしましょう。」

馬方「おうい、クリ公。思いつきりふんぼつて引け。」

馬「ヒヒーン、ムムム。がんばっているんだけど、荷車が重すぎて動きません。おやかた、いっしょに引張つてくださいますか。」

馬方「よし、おれは、輪をかついでみよう。」



馬方は、馬のたづなを離して、荷車の輪のところへ行きました。